

これも経済学だ！



樋口 倫生

10月9日に発表された2006年のノーベル経済学賞は、コロンビア大学のエドモンド・フェルプス教授に授与された。長期的に失業とインフレの間には、トレードオフの関係は存在しないというマクロ経済学理論を打ち立てた貢献が評価された。フェルプス教授の扱った失業やインフレは、通常、経済学の分析対象となる変数である。

一方、伝統文化や宗教、さらには社会的弱者といった経済学の領域外と思われるものに対し、経済学的な視点で分析を試みたのが、『これも経済学だ！』である。本書の問題意識は、経済的合理性を用いることで、相撲や仏教、さらには障害者まで、経済学の研究対象になりうるということにあり、豊富な事例を挙げてそのような応用問題を解いてみせている。

まず第1章は、経済学の知識をもたない読者のための簡単なレッスンとなっている。厳しいしつけはインセンティブを歪め、必ずしも、正直なこどもにしないこと、勉強自体が将来の所得と関係していないので大学生はカンニングを行うことなど、各主体の誘因に照らし、諸現象に対する解釈が並べられている。またアンケートにおけるセレクションバイアスの指摘など、専門家も傾聴に値する言及がいくつかある。

第2章では、伝統文化の一つとして大相撲をとりあげている。相撲界が年功による賃金体系になっている理由は、相撲の技術あるいは力士の体型が他に転用できないもの、つまり特殊な人的資本を形成しているためだという。実力による賃金制では、過去に高成績をおさめていても、力が衰えた力士は引退を余儀なくされ、長い時間をかけて蓄積した人的

資本が無駄になる。この場合、資本投資を行うインセンティブが失われ、相撲自体が成り立たなくなるであろう。

続く第3章は、宗教サービスの究明であり、日本の檀家制度に関し詳しく記述されている。例えば、江戸時代まで日本の僧侶は、一部の例外を除き、肉食と妻帯を認められていなかったが、明治以降になぜそのような戒律を捨ててしまったのか？これに対する回答は次のようになる。檀家制度のもとでは、寺が、家族墓を継続して守り、住職と語り合える憩いの場となることを檀家は望む。それゆえ僧侶は厳しい戒律を守るインセンティブを失い、寺の継続性のために妻帯して世襲化し、また檀家と食事を行うため肉を食するようになったと説明する。

第4章は、障害者についてである。この章を通じて筆者は、経済学的に物事を理解することの重要性を強調し、モラルに訴えることは根本的な問題解決に繋がらないと主張する。公共性の高い建築物に障害者向け設備の設置が義務づけられているにもかかわらず、検査のために見せかけの設備をつくったホテル社長を道徳的に非難することは、問題の本質的な解決にならない。そもそも、見せかけだけの設備をつくるのは、障害者用客室の稼働率が低いためであり、そして稼働率が低いのは、障害者が気軽に外出できる環境にないことに起因する。問題はインフラ整備の遅れだ、と看破する。

最後の章は、本書のまとめである。経済学は、合理性をもとに人間行動を理解する学問であり、宗教や伝統文化など従来あまり扱われなかった分野にも適用できる守備範囲の広いものであることが示されている。

以上のように、経済学的思考で物事をみる必要を説く本書は、難問の山積する農業を考える上で、誠に示唆に富む教科書だ。例えば、農業政策の策定は、生産者だけでなく、消費者のインセンティブを十分に認識した上で行わなければならないということがその一つである。

中島隆信『これも経済学だ！』ちくま新書、(2006)
(客員研究員)